

# 明治大学 軽音楽クラブ・BSSO 物語

ビッグ サウンズ  
ソサエティ  
オーケストラ



定期演奏会でのカントリー・ケーパース

## 明治大学楽友会

(軽音楽クラブ・BSSO OB・OG会)

### 高津 敏栄

#### クラブの成り立ちから

「軽音楽クラブ」が正式に大学公認となつたのは、一九六一年のことである。

OB会誌「楽友」の連載に、創設期の島田尚彦、安藤正樹、田村和雄、藤井英一、大江(旧姓・佐藤)純子、中田健一、久下昌洋、堤浩一各氏ら、転換期の高橋(旧姓・三上)芳郎、安カ川大樹両氏など、多くのひとたちが書き綴ってくれている、その縁起話も参考にさせていただき、経緯を総合する。

#### それはジャズのバンドから始まったが

一九五六年頃、島田、安藤両氏および稲垣博達氏(故人)が中心となり、そこに知り合い二人を加えて、五人編成のジャズ・バンドを結成、大学内外で活発にやっていた。

そうこうして五八年春、学内の、「ジャズ愛好者募集」のポスターを見た田村氏を始めとする面々が、先の五人に合流。総勢三〇名ほどとなって、クラブ結成の機運が芽生えた。さっそく、設立趣意書などを揃え、「ジャズ・クラブ」として学生課に提出した。

しかし、数日後にあった返答は、いかにもまだ当時からしい内容のものだった。

「ジャズなどという類廃的な音楽を、勉学にいそしむべき学生がやることは、大学の本質に反する。よって不許可とする。」

これによって、クラブ設立運動は、あえなく自然消滅の憂き目にあってしまった。

再燃した設立運動

一度は頓挫したクラブ設立運動が、翌五九年春、島田、安藤両氏と田村氏のキャンパスでの偶然的の再会によって、第二ラウンドを迎えた。今度は、周到に準備を整えた。

公認団体となるには大学当局への届け出だけでは足りない。一部学生の組織である文化部連合会(文連)または二部の研究部連合会(研連)のいずれかに所属しなければならぬ。公認までの時間が短いと言われる研連を選んだ。

学生課攻略作戦も抜かりない。名称は「軽音楽クラブ」。ハワイアン、タンゴ、ウエスタン等民族音楽の研究サークル、と届け出た。ジャズは伏せた。ほかのジャンルのメンバーは、後付け。それからあわてて募った。当時、学生課には、案外にも、ちゃんと理解者もおられて、西、伊藤両氏などからは、激励も受けた。

クラブの部長は大学の教授または助教授とされている。田村氏が文学部英米文学の橋忠衛教授に当たってみた。私はやれないが、と紹介してくれたのが、独文の小川茂久先生。まだ講師だったが、助教授になるまでは私が後見役となるう、との粋な計らいだった。

こつした昔の暴露話には、どうか笑って済ませてもらいたい。

その頃は、どんなバンドが

ジャズ・バンドは、基礎が固まり、「メランコリー・キャッツ」という名前も付いた。

ハワイアンは、以前から独自の活動を開始していた。「高村精二とマウイスターズ」。そこを、リーダーの菅谷秀雄氏が島田氏や田村氏に口説かれ、合流したのだった。それがメンバー交代を経て、後にまで続く「ワイキキドリマーズ」というバンド名に変わった。

この頃、ガール・ハワイアン・バンド「ホワイト・アンド・セビアーズ」も、お茶の水の喫茶レストラン「アミ」での初ステージで産声をあげていた。その「アミ」は今も健在。ハワイアンの何人かが、法大カントリー・レジャースの御園氏の指導を仰ぎ、独立して活動を始めた。カントリー&ウエスタンの「カントリー・ケーバース」の誕生だ。

デキシerland・ジャズの「ジャミング・ホット・セブン」も出来ていた。ニユーオルリンズやシカゴのスタイルだけでなく、カンサシテイのテイストなどもあった。スウィングから、中間派と言われるその時代の特有なスタイルまでを指向する、「スウィング・バンド」もあった。

島田氏はかねてから、ジャズのビッグ・バンドを編成することも夢としていた。一七人編成を基本とするオーケストラである。その頃、「メランコリー・キャッツ」の中田氏は、プロとして仕事もしていて、あるダンス・ホテルのバンドでピアノを弾いていたのだが、何かの事情でギャラが貰えず、替わりにパン



軽音楽クラブとして最後となった定期演奏会パンフレット表紙

ドの譜面を大量に貰い受けた。その中には、ラテンものなどのほかに、カウント・ベイシーやスタン・ケントンなどの貴重なレパートリーも混ざっていた。そんなきつかけが、「ビッグ・サウンス・ソサエティ」を生み出した。泣かせる誕生秘話である。その後、名前に「オーケストラ」が付き、「BSSO」となる。先行のジャズ関係コンボ（小編成バンド）との兼任から、徐々に独立した。

### 仮公認、しかし悶着のすえ、 文連に移籍

部員の小島一紘氏の尽力もあって、申請のひと月後（五九年）に研連から仮公認が出た。ところが、楽器類がスペースを占領し過ぎた問題などで、他サークルや研連との間に摩擦が生まれ、ついには研連から撤去命令が出るという一大事が起こってしまう。

研連での仮公認状態を引き延ばしつつ、並行して文連への移籍運動が始まった。

そして、六一年秋になって、ハワイアンの藤井氏などの努力が実を結び、ついに文連から公認団体として受け入れられた。正史としては、これが紀元ということになる。

クラブとして認められてからも、活動の基本は各バンドの独自性で、単独でのコンサートのほか、ジャンル別に他校や各種連盟などとの交流も盛ん。そのほか、よそからの、バンド単位での依頼や招きも多い。かつてダンス・パーティが華やかだった時代には、早い、うまい、安い学生バンドは需要が豊富で、年末などは凄まじく繁忙だった。

それからバンドは更に増えて、一時は、カントリー&ウエスタンの一ジャンル、ブルー・グラスの「プルー・リッジ・マウンテン・ボーイズ」もあつたり、大変な勢力となった。そこで企画された全バンド合同での定期演奏会は、結束を確認し合うための場でもあつた。クラブとして成長した結果の必然的な方策だったのだ。

### 時節は巡り、新しい段階へ

定演の会場は、後楽園脇の文京公会堂が多かった。長く続いたが、異ジャンル混合の難しさもあつて、各バンドにとつて入場券販売が重荷にもなつてきていた。それに、一バンドあたりの出番は短時間で、もの足りない。それぞれが力を付けてくるに従つて、独自の単独ライブやリサイタルへと、ますます重心が移るようになっていった。

かつて、運営上の必要から、一つのクラブとして旗揚げした。それ故一枚岩のまとまりはあつても、音楽ジャンルの違いから見れば、寄り合い所帯と言われても否めない。

七八年、高橋（旧姓・三上）氏らの苦渋と英断によつて、定演は、駿台祭を機に、会場を教室や記念館へと移し、静かにフェイドアウトしていった。

このベクトルは、更に加速する。八九年、



プロとして活躍するOBたちによるジャムセッション

たまたま大学の事情による部室移転を機に、練習場所確保の有利さを求め、部内での協議に基づいて「BSSO」が独立の道を歩むことになった。その年にパンマスを務めていた安力川氏らの、果敢な選択がそこにはあつた。結果の創世記を過ぎ、巣立ちするまでに難が育つたのだ。



ワイキキドリーマーズのOB・OGバンド

伝統の重さはかけがえが無い。しかし、それでも、伝統の過度な頑強さや窮屈さを突き拓いて、飛翔したのだった。諸行無常、輪廻、因縁を感じる。

経営学部の本根孝教授に部長を引き受けてもらい、翌年には、文連の公認を得た。

この年、学生ビッグ・バンド界で最も権威のある、「山野ビッグ・バンド・ジャズ・コンテスト」において、「BSSO」は初の最優秀賞を獲得し、彼らは報われた。

### 七〇年安保の時代： 少っだけ私自身のこと

私が入学したのは、六九年。間もなく「BSSO」に入った。中学で吹奏楽、高校で合唱を経験したが、管楽器の入った大編成が好きで、また、ジャズに魅力を感じ始めていた。

七〇年安保闘争と学費値上げ反対の運動が絡み合っ、学内は騒然とし始めていた。私の文学部史学地理学科日本史専攻では、講義が過激派に乗っ取られて、討論集会に切り替えられてしまうこともしばしばだった。活動に関わっていた親しい友人が何人かいたこともあって、心情的には彼らを支持する気持ちが無くもなかったが、私はジャズに傾倒した。

なぜか、当時は活動家の多くが、よくジャズを聴いていた。新宿には、風月堂のほかに、彼らの溜まり場となったジャズ喫茶もあった。きっと、ジャズが破壊的エネルギーに満ちた音楽と映っていたのかもしれない。それだからなのか、ジャズをやっている私に、あたたかも同志であるかのような生暖かい接し方

をする友人もいたりして、ちょうど、その趣味も無いのにゲイに色目を使われた時のような危険を感じ、妙な気がしたこともある。

### 合宿にて

年に何回か、大きいコンサートなどに先駆けて、合宿を行っていた。

何日も音楽漬け。頭の中は音や音符に占領されている。

ジャズでもよく使う変形リズムに、二拍を三つで刻む「二拍三連譜」というのがある。

寝室はすし詰めで、雑魚寝。二枚の蒲団に三人くらの見当。

ある晩、蒲団を敷き敷き、同期の荒井和男氏が、昼間の練習を思い出すように、いつに似合わずタイミンクよく、「二拍三連か」とつぶやいた。爆笑とともに疲れが吹っ飛んだ。お決まりの春歌や踊りを覚えたのも、合宿最終日夜、打ち上げのこと。

### 与太郎の一席

吉永小百合さんの早大入学が話題の頃、私はまだアオイ高校生だったと思うが、早稲田関係のサユリストたちの熱狂が羨ましかった。

同じく憧れの松原智恵子さんが明治というのも聞いていて、あちらには受験で失敗したのに、辛うじてこちらに受かって、軟弱にもそれなりに嬉しくなった。パンカラな校風イメージの大学に清楚な鶴、らしくもない俄か愛校心に、思わず呆れた。

学内の過激さがエスカレートし、大学は口ツク・アウト。楽器の置き場に困った。



「OBバンドの演奏を楽しむ会」に出席した宇崎竜童氏

そこで臨時の置き場になったのが、我々より二年上で、デキシードとBSSOのピアノを掛け持ちしていた、和泉寿時氏の自宅。なんと、氏のお姉さんは、今をときめくもう一人の日活の大看板、和泉雅子さん。まだ北極への冒険旅行を始める遥か前の、人気絶頂期。ある日、広い家に楽器の搬入を終えた一同は、「こ苦労さま」と、あのアイドル・スター手ずからの紅茶とケーキを振舞われ、いきなり緊張し、すっかりあがってしまった。

### OB・OGたち、 そして小川先生のこと

やはり同期の能勢博氏が、かつて子どもの小学校でPTAの会長を引き受けた。事情があつて開校以来校歌が無かつたが、ちよつと、校歌を作ろつとということになった。

学校関係者とも相談の上、彼は、宇崎竜童氏と阿木耀子氏に曲と詞を依頼した。実は、宇崎氏（本名・木村修史）はデキシードでトランペッター、阿木氏（本名ノ旧姓・福田広子）はガールズ・ハワイアンでスティール・ギターという、六八年卒業の同期の仲で、クラブ活動が出会いの場だったのである。お二人は、その後結婚した。

両氏の同期、中村眞一氏と尾崎桂一郎氏のお骨折りもあつて、快く引き受けてくれた二人から届けられたのは、モダンでロマンチックな校歌「歌が生まれる」だった。

同じ年の六月、OB会主催で恒例となつた「OBバ



最近のBSSO



明治大学校友会規則制定120周年記念祝賀会(2002年11月30日)で演奏するBSSO

ンドの演奏を楽しむ会」に出席した宇崎氏は、ギターの弾き語りでそれを歌った。会場に居合わせた、茨城県馳馬台小学校の子どもたちは、目をうるませて聴き入り、一緒に口ずさんでいた。九九年のこと。

OB・OGは、約一二〇〇名を数える。

永きに亘ってクラブを支えてくれた小川先生は、文学部の川台高信教授に後任を託し、九一年に退職、九八年に他界された。お酒を多々嗜む、軽妙にして洒脱な先生であった。

そして、現在は

「ワイキキ・ドリーマーズ」は、「ハワイアン」を取り、「ドリーマー」と改めた。「ポップやロック、ポップス全般がレパートリー。残念ながら、ガールズ・ハワイアンは無い。「カントリー・ケーバース」は、六〇〜八〇年代の、E・クラブトンやイギリスなど、ロック系が主。名前は「ケーバース」に。ブルー・グラスが無いのも仕方ない。

ジャズ関係では、デキシーとスウィングが姿を消してしまっただが、「メランコリー・キヤッツ」は、フュージョンの時代を経て、再びフォー・ビートに回帰している。

独立を果たした「BSSO」は、山野楽器のコンテストで、幾度かの最優秀賞を経験した上で、二〇〇〇年から昨〇二年まで、単独バンドとしては初めて三年連続最優秀賞に輝いた。しかも、最優秀ないし優秀ソリスト賞にもまた、同時に三年続けて選ばれた。

その快挙と精進は大学に評価され、先頃、褒賞を受けた。